

留学報告書

アリゾナ大学植物科学科
種田 修三

留学初年度のパナマへのサンプリング旅行から早2年、そして今春のチリ旅行からも半年が経ち、このプロジェクトは折り返し点に来た。各研究チームにデータが溜まってきていたため、10月初旬に中間報告会が開催された。この報告会にはプロジェクトに関わる全ての研究者が一同に集い、参加者は総勢18人にもなった(写真1)。写真中の何人かの顔が引きつっている理由は、写真撮影をお願いした通りすがりの学生が火の付いたタバコを手に持ったまま、潔癖症気味の教授の携帯電話で撮影していたため、携帯は30秒近くタバコの煙に燻されていた。そのため、教授がいつキレるかともみんなでビクビクしながら写真に写っている。結局その場ではキレなかったものの、その後で教授は悪口を言いまくっていた。

報告会はノースカロライナ州 デューク大学で行われた。データ報告会ということもあり、私はプレゼンを順調に用意していたのだが、予定の1週間前に教授から、「Duke 大学にはいい感じの植物園があるからサンプリングもやっちゃおう！」と言われ、大慌てで準備に取り掛かった。教授のノリ的には採集する植物数も少ない感じだったのだが、蓋を開けてみればいつものサンプリング旅行と変わらぬハードさであった。スラントと呼ばれる、菌を培養するための培地が入ったチューブを1週間で1万本ほど作製した。同時にプレゼンの練習等もあり、怒涛の1週間だった。デューク大学に着いても一切気は抜けず、他のメンバーが食事とワインを楽しんでいる間にも、我々は仮設のラボで働く始末。「アリゾナ大学から来た人たちはいつも働いてるねー(笑)」とひたすらいじられるのだった。我々がこのプロジェクトのメイン研究室であるということもあり、最初に起きて最後まで働いているのはいつもアリゾナ大学チームなのだ。チリでは夜2時半まで研究室で作業をしたこともあり、もう慣れっこである。そのおかげでリターンは大きく、かなり多くのデータを得られていることが救いである。



*1 プロジェクトメンバーの集合写真(前列右から2番目が筆者)

初日と2日目は各グループからのプレゼンがあり、私のプレゼンも無事に終了した。3日目には次のサンプリング旅行の目的地について議論が行われた。残った目的地は南アフリカ共和国と東南アジアのボルネオ島。そのあたりをよく知る人物らと共に、季節はいつがいいか、植物の採集許可を取るには何ヶ月必要なのかを話し合った。教授らは来年中に少なくともどちらかへの旅行は終わらせたいようで、来年南アフリカに行く場合、ベストな時期が3月頃であることと採集許可が下りるのに半年ほどかかる可能性があることから、今から準備しても時間的に厳しいと判断し、最後に行くことになった。ということで次の目的地は東南アジアのボルネオ島、日程は2018年の5月頃に決定した。そして、ボルネオ島にあるキナバル山に登ることが決まったのだが、山頂の標高は4000mを超えるようだ。早速ネットで検索してみると、ハイキングコースが整備されており、標高の割には登頂が簡単な山であると書いてある。これで安心したのもつかの間、キナバル山を経験したことがあるメンバーが、「山頂アタックをするなら標高3500mくらいにある山小屋を朝の2時くらいに出発して午前10時までに戻らないとダメだよ、それ以降は霧で視界が悪くなって遭難して死ぬ可能性があるからね。」と語りだす。それを聞いた地衣類の研究チームは半分冗談だと思って笑いだす。しかし我がラボの教授は真面目な顔をして、「いやいや、笑い事じゃないから。」と一瞬でその場を制した。この言葉を聞いて私は何度も首を大きく縦に振る。なぜなら、山頂アタックするのは間違いなく我々アリゾナ大学チームなのだ。地衣類チームは年齢的及び身体的な問題もあり、登頂は他人事である。実際、パナマでの登山では地衣類チームが早々に脱落し、最後まで登ったのは2、3人の学生と我々だけだった。さらには、以前の留学報告書でも書いたが、我々のサンプリングではハイキングコースから外れて植物を採集しなければならない。標高3000m以上の場所でのこのような行為にはかなりの注意が必要だろう、そもそも今回はコースから外れられるかすらわからないが、ともあれ、安全が確保できる範囲でサンプリングをすることを確認し、旅程を決定した。

また現在、ラボではこのプロジェクトを遂行するために5人もの学部生や研究助手を雇っており、彼らの教育やコミュニケーションに追われる日々を過ごしている。彼らには英語のスペルミスでいじられたり、こちらが向こうをいじったりといい感じの関係を築けている（のではないかと勝手に思っている）。ラボに来た当初は何も分かっていなかった学部生が卒業間近になって、将来は研究職を目指したいと言ってくれるようになったのが最近の嬉しかったことだ。

上記のプロジェクトに加え、この夏には新たなプロジェクトを開始した。今まで研究材料として植物と微生物ばかり触ってきたのだが、このプロジェクトでは農業害虫であるイモムシを用いている。虫取り大好き少年だった私としては、日常的に虫に触れることは非常に嬉しい。なにより、イモムシの動きがはっきり見えるのはなんとも面白い。餌を食べたり、他のイモムシとぶつかったりとせわしない。植物や菌はそういった点では少し地味なのだ。だからといってこれらが嫌いというわけではないし、むしろ好きなのだが、ただただ地味なのだ。なんにせよ、より優れた農学の研究者になるためにも、こうした専門分野外の経験をすることは有益だと思う。この新しいプロジェクトが進化生態学の基礎研究として貢献するだけでなく、害虫駆除等の応用研究にもつながればと考えている。